

展 示 評

～外からみる奈良博～

「七支刀と石上神宮の神宝」展を見て

滋賀県立大学教授 田中 俊明

特別展「七支刀と石上神宮の神宝」が今年の一月四日から二月八日にかけて開かれた。石上神宮といえど、すぐに国宝の七支刀がすぐに思い浮かべられるほどに、両者の関係は広く知られている。わたしもこれまで七支刀は国宝展など何度か見る機会があった。しかし、今回の展示は、七支刀のみでなく、石上神宮が物部氏と関わり、武器・武具が多く奉納された宝庫であったというその歴史の一端をかいま見させる興味深いものであった。仁徳紀にみえる鉄盾に結びつけるみかたもあつた鉄盾は、想像以上の大きさであつたし、鎌倉・室町になつても奉納される武具類が多かつたことも実感しえた。ただここでは、やはり七支刀についてふりたい。公開講座の六〇分では、とうてい話し尽くせず、ここでも分量的に無理であるが、久しぶりに見て、あらためて考えたことがある。

何をおいても重要なものは銘文である。その釈読しだいで、刀の持つ意味がまったく変わってしまう。金象嵌の金が剥落し、X線によつても、また拡大写真によつても判読不能な部分が少なくない実情は、実際に目視したところで変わるはずもない。しかし、できあがつた刀に文字を彫るときに圧力を加えたのであるから、そうした分子組成？の分析ができれば、圧力の強弱によつて生ずる差で、文字の復元が可能ではないか。刀自体を破壊することなく、そのような分析が可能になるのかどうか、それが問題であるが、今後に期待したい。

銘文の中で肝腎な箇所は年号である。今回も注視した。表の冒頭、泰につづく、二字目である。宮崎市定著『謎の七支刀』の影響力は今なお極めて大きい。確かに読んでいて面白い。しかし面白くても、認めがたいところも少なくない。宮崎説では「泰始」である。二字目は肉眼でも禾扁の三画までは確認でき、女扁とみるには、相当に寝かさなければならぬ。実際、そのように復元するのであるが、それよりも、銘文を再発見した菅政友が泰始と読んでいることを重視する。なぜなら、泰和という読みは、

『日本書紀』に引きずられた意図的な読みであるのに対して、菅政友は純粹な目で読んだからという。『日本書紀』に引きずられた、というのは、『日本書紀』の神功摂政五年条（千支二運繰り下げ修正すれば三七二年）に七支刀や七子鏡などを百済が献上してきたと記す記事がある。泰和四年は三六九年にあたり、三七二年に近い。それが引きずられたとする理由であり、実際にもその通りである。しかし菅政友が果たして純粹な目で泰始を導き出したかという点、それは疑問である。当時は『日本書紀』の紀年論争がなお決着をみていない時期で、神功紀五年は、修正しなければ二五二年にあたる。二字目を読みづらい女扁で読んだのは、二五二年に近い泰□を求めた結果とみるべきである。泰始四年（西暦）は二六八年で、少し差があるが、いちばん近い。決して予断を排して得られた釈読ではないのである。それでは信頼できない。『日本書紀』の七支刀は、この七支刀を指していることにまちがいない。枝と支は同じ字とみてよい。しかも年代もずれなく解釈できる。『日本書紀』の記録と合致するものが、このように伝わるのは極めてまれで、それだけに価値が高まるのである。

『日本書紀』が献上とするのに対し、下賜だ、いや対等の立場で、という議論がある。百済は、先進の高句麗と対抗する困難な道を選んだため、南の加耶南部や倭国と同盟を結ぶ必要があつた。実際に高句麗と激しい抗争をしている時期であり、三七二年には高句麗王を戦死させている。倭に対しては下の勢力とみなしたはずで、下賜したとみるのが基本であろう。ただそれは倭国がどううけとめたかということとは別である。それにしても、発掘の進む百済地域で類例が全く出土しないのは、よほど特殊な刀であつたということであり、改めてそのような刀を贈った百済王世子近仇首や当時の百済の状況に思いを馳せないわけにはいかなかった。